

# 信飛国境地帯奈川村の方言

馬 瀬 良 雄

## はじめに

奈川村は長野県南安曇郡最南端に位置し、梓川の支流奈川の全流域を占める飛驒山中の村である。山奥の隔絶された辺陬の地であるが、かつては飛驒と鎌倉あるいは江戸、また、信濃と飛驒とを結ぶ街道の通過地としてにぎわった。古くは安房峠を越え安曇村大野川より奈川村角ヶ平、同入山を経て安曇村島々へ抜ける鎌倉街道が広く利用され、一方、野麦峠より奈川村寄合渡を経て境峠を越えて木曾葎原に至る道は鎌倉時代から官道として重要視された。しかし、江戸中期から野麦峠より奈川村を縦断し、安曇村稲核を経て松本へ向かう野麦街道による往来が盛んとなり、これが主道となった。江戸から明治にかけてが野麦街道の全盛期である。飛驒ブリなどの日本海の塩魚や諸物資はこの街道によって運ばれ、飛驒からの女工たちもこの街道を通して岡谷へ向かった。しかし、国鉄中央線の開通により街道による交通は一挙に衰退し、村は急速にさびれ、人口流出の多い寒村となった。

近時、奈川村黒川渡—安曇村中ノ湯のスーパー林道、野麦峠の観光化、白樺峠の別荘開発などにより、村を観光その他により脱皮させようとする努力が続けられている。なお、奈川渡ダムにより1集落全部湖底に沈んだ角ヶ平をはじめ、田ノ萱、入山の諸集落から約60戸、300人が離村し、村の中で他の地籍へ移住した戸数も多い。人口1431人（昭54）、面積120.56 km<sup>2</sup>(1)。

奈川村は東西両方言の境界である信飛国境にあり、方言上極めて重要な地域に位置を占める。一方、奈川渡ダムにより一部の集落は水没し、それにともなる人の移動があり、それらに関する集落の固有の方言は失われ、忘れられようとする危機に瀕している。かつ、他の集落でもテレビなどのマスメディアにより、古い方言は変質しようとしている。かかる状況下において、この方言を老年層を中心に調査し、記述することは、東西方言対立の境界地帯の方言の実態を明らかにするだけでなく、信飛交流の歴史を解明するための手掛かりを提示するという点で、極めて緊急にして必要なことと考える。以下、紙数の関係から語法を中心に取り上げ、その特徴点に重点を置きつつ記述し、かつ方言の位置について述べたい。

主なる調査集落は、最も松本寄りに位置する入山、中部の古宿、野麦峠寄りの神谷及び寄合渡。インフォーマントは次のとおり（かっこ内は生年）。入山・忠地弥太郎氏（明40）、古宿・忠地まつ氏の氏（明39）、同・忠地愛子氏（昭8）、神谷・奥原誠一氏（明26）、寄合渡・奥原主馬吉氏（明25）。

以下の記述では次の事項につき、古宿方言を中心に、他の集落の方言的特徴をも取り上げる。寄合渡方言は神谷方言の中に含めて扱う。なお、表記は音韻記号をもってする。

- 1) 動詞
- 2) 形容詞
- 3) 表現
- 4) 奈川村方言語法の位置

## 1 動 詞

動詞の活用は表1のとおりである(表の活用形の( )は交替語幹を示す)。

動詞活用の種類は表でみるようにA, B, C及びDの3種類を区別すれば足りる。Aは4段型, Bは1段型, C, Dは変格型と称することができる。

表1

種類	語例	活用形 語幹	未然	第1 連用	第2 連用	終止- 連体	禁止	目的	仮定	命令
A	1 kaju(喫く)	kap-	-a	-i	-i	-u	-u	-eR	-jaR	-e
	2 huku(吹く)	hu(k)-	-a	-i	-(i)	-u	-u	-eR	-jaR	-e
	3 hanasu(話す)	han(as)-	-a	-i	-(eR)	-u	-u	-eR	-jaR	-e
	4 kacu(勝つ)	ka(t~c)-	-a	-i	-(Q)	-u	-u	-eR	-jaR	-e
	5 toru(取る)	to(r)-	-a	-i	-(Q)	-u	-N	-eR	-jaR	-e
	6 'jomu(読む)	'jo(m)-	-a	-i	-(N)	-u	-u	-eR	-jaR	-e
	7 ka'u(買う)	ka-	-wa	-i	-Q	-u	-u	-weR	-wjaR	-we
	8 'juR(言う)	'ju-	-wa	-i	-Q	-R	-R	-weR	-wjaR	-we
B	1 miru(見る)	m-	-i	-i	-i	-iru	-iN	-eR	-irjaR	-iro
	2 'ukeru(受ける)	'uk-	-e	-e	-e	-eru	-eN	-eR	-erjaR	-ero
	3 tateru(建てる)	ta(t)-	-e	-e	-(Q)	-eru	-eN	-eR	-erjaR	-ero
	4 kureru(呉れる)	kur-	-e	-e	-e	-eru	-eN	-eR	-erjaR	-o
C	kuru(来る)	k-	-o	-i	-i	-uru	-uN	/	-urjaR	-oi
D	kaseru(貸す)	kas-	-e	-i	-i	-eru	-eN	-eR	-erjaR	-jo

活用形は8形の区別を有する。活用形はその機能またはそれに接続する付属語の語法的意味の一部によって、そのおのおのに名称を与え、未然形、第1連用形、第2連用形、終止-連体形、禁止形、目的形、仮定形及び命令形と呼ぶ。活用形の用法を説明する。

未然形 -ba (仮定), -N (打消), -zu (意志及び推量), -rareru (受身) などが接続する。

tejami kagaba<sup>(2)</sup> Nmagu kage (手紙を書くなうまく書け). 'iQsjoni 'igazu (一緒に行こう). bagani sirareta<sup>(3)</sup> (馬鹿にされた)。

第1連用形 -ter<sup>(4)</sup> (~たい), -sima (~ながら) などが接続する。中止形としても用いられるが、共通語的と意識されている。

kuisima hanasazu (食べながら話そう). maQto nomiteR (もっと飲みたい)。

第2連用語 付属語 -te, -ta などが接続する。

doge 'iQte kitaga (どこへ行って来たか)。

終止-連体形 文を終止する。体言や -zura, -ra (推量) などが接続する。

hoN<sup>(5)</sup> 'jomu (本を読む). 'ame huruzura (雨が降るだろう)。

禁止形 -na (禁止) が接続する。

kaguna (書くな). toNna (取るな)。

目的形 目的を表わす。

hoN ka'weR 'igu (本を買いに行く). kuri hireR 'igu (粟を拾いに行く).

仮定形 仮定を表わす。

'jomjaR 'jeR (読めばよい).

命令形 命令を表わす。

ha'jagu koi (早く来い). 'oreni kasjo (俺に貸せ).

動詞活用で注意すべき点をあげる。

'osu (押す), kakusu (隠す), hanasu (話す) など、共通語のサ行5段活用に対応する語は、古宿方言では細かくは3種に分かれる。相違は第2連用形にあり、-ta (過去, 完了) を接続させると、次のようになる。

'osita (押した) kakuita (隠した) hanerTa (話した)

つまり、'osu はいわゆるサ行イ音便形を持たず、kakusu 及び hanasu ではそれを持っている。かつ、後者2語における違いは後者が連母音の融合を示している点にある<sup>(6)</sup>。

なお、入山方言では hanerTa は hanaita としてあらわれる。また、神谷方言ではサ行イ音便を、少なくとも今の老年層では欠くようである。

共通語の「漕ぐ」「嗅ぐ」「研ぐ」などが行5段活用動詞は、第2連用形で付属語「た」が接続すると、それぞれ、ko'ida, ka'ida, to'ida となるのに対し、古宿方言ではそれらに対応する kojū, topū では、-ta が接続すると、それぞれ、kojita, kapita, topita となり、いわゆるガ行イ音便形を取らない<sup>(7)</sup>。

ただし、入山方言では、上の語はそれぞれ koNda, kaNda, toNda となり、古宿方言とは異なる。

tateru (建てる), kateru (加える), sodateru (育てる)<sup>(8)</sup> は、共通語と異なり、第2連用形で -Q をとる。たとえば、taQta (建てた), kaQte kuro (加えてくれ), sodaQta (育てた) のように<sup>(9)</sup>。

kureru (呉れる) の命令形は kuro. kurero や kure は用いない。ただし、入山方言は kurjo となる。入山方言では、B、C及びD型動詞の命令形は -ro をとらずに、西日本方言的な -<sup>(10)</sup>jo を用いる。たとえば、

mi'jo (見ろ) de'jo (出ろ) 'ogjo (起きろ) misjo (見せろ)

などのように。もっとも古宿方言や神谷方言で -<sup>(10)</sup>jo を全く用いないのではない。1語ではあるがD型活用 kaseru (貸す) の命令形 kasjo に -jo を確認することができた。他の語では、miro (見ろ), dero (出ろ) のように、東日本方言的な -ro をとる。

語彙的な問題と言えるが、存在動詞 'iru を用い 'oru を用いない。ただし、入山、角ヶ平、田の萱では 'oru を用いる。この点でも入山などの方言は西部方言的である。

共通語⇨変動詞「する」に対応するこの方言の動詞 siru は、1段型活用をし、B1型に属する。ただし、saseru (使役) が接続すると saseru となる。先にあげた文例のように -rareru が接続するときは sirareru であって、sareru は新しい使い方である。

## 2 形 容 詞

形容詞の活用表を表2として示す。活用の種類は細かく分ければ3種類となるが、その差は表を見るように小さい。活用形は6種を立てれば足り、これを未然形、第1連用形、第2

表 2

種類	語 例	活用形	未 然	第 1 連 用	第 2 連用	終 止 - 連 体	仮 定	様 態
		語幹						
1	'usui (薄い)	'usu-	-gara	-gu	-igaQ	-i	-gerjaR	—
2	'ageR (赤い)	'ag(a)-	-gara	-gu	-(eR)gaQ	-(eR)	-gerjaR	—
3	'jeR (良い)	'j(o)-	-gara	-gu	-(eR)gaQ	-(eR)	-gerjaR	-sa

連用形、終止-連体形、仮定形及び様態形と呼ぶ。活用形の用法を簡単に述べる。

未然形 -zu (推量) が接続する。

soremo 'jogarazu (それもよからう)。'jogaraba<sup>40</sup> 'jare (よければやれ)。

第1連用形 -te (〜て)、-temo (〜ても) などが接続し、また動詞を修飾する。中止形としても用いられるが、共通語的である。

'agagu naru (赤くなる)。

入山・角ヶ平方言では、この場合、古くは -gu に代わり -R を用いたと言う<sup>41</sup>。たとえば、'agoR naru (赤くなる)、'joR kita (良く来た)、ha'joR koi (早く来い) などのように。これはいわゆるウ音便形と言われるもので、西部方言の特徴の一つとして数えられるものである。

第2連用形 -ta (過去)、-cura (過去の推量) などが接続する。

sorjaR 'jeRgaQcura (それは良かったろう)。cura 'ageRgaQtazo (顔が赤かったぞ)。  
kotosja 'ameno higa 'oRigaQta (今年は雨の日が多かった)。

共通語などと異なり、第2連用形は次に述べる活用形、終止-連体形に -gaQ が接続したものであることが分かる。したがって、この活用形は省き、次の活用形の中で取り扱うことが可能であり、その方がより合理的であるとさえ言える。つまり、ここでは形容詞の活用形が部分的とは言いながらも、活用形の機能を失いつつある状態をみることができる。なお、古宿以外の調査地点では、'jeR (良い)、'ageR (赤い)、'oRi (多い) の各語をとれば、第2連用形は、それぞれ、'jogaQ-, 'agagaQ-, 'oRgaQ- である。

終止-連体形 文を終止する。体言や -zura (推量) などある種の付属語が接続する。

sorjaR 'jeR (それは良い)。'ageR cura (赤い顔)。hu'ju'wa sabiRzura (冬は寒いだろう)。

仮定形 仮定を表わす。

teNgi 'jogerjaR 'igasuto 'omo'u (天気が良いければ行こうと思う)。

'jogerjaR は 'jogerja と同、また、'jogjaR ないし 'jogja としても用いられる。

様態形 -soRda (様態) が接続する。

'josasoRda (よさそうだ)。tagasoRda (高そうだ)。

様態形として -sa を持つ語は、調査した範囲では 'jeR (よい)、neR (ない) の2語である。

入山方言では、様態形は 'eR (よい)、tagai (高い) を例にとれば、古くは 'jogari-soRzja、tagagari-soRzja によってあらわされたという。

なお、meNdoi (面倒だ)、ka'waiseR (かわいそうだ) など、共通語で形容動詞の活用をする語で、奈川村方言で形容詞に属する語が若干ある。

## 3 表 現

特徴的な表現について述べる。

## 1) 推量・意志・勧誘など

-zura 推量表現に最も一般的に用いられる。動詞・形容詞・形容動詞・体言・ある種の副詞に接続する。

'asitamo 'ame huruzura (あしたも雨が降るだろう). soR siruja 'jeRzura (そうするのが良いだろう). sokaR sizukazura (そこは静かだろう). 'arja gaQkoRzura (あれは学校だろう). sorja soRzura (それはそうだろう).

-ra 推量表現には -ra も用いられる。-zura との文法的意味の差異は必ずしも明らかでない。接続は -zura よりも狭く、動詞・形容詞には接続するが、他の品詞には接続しえない。

'ano hitaR 'jameR 'igura (あの人は山へ行くだろう). soNna kota neRra (そんなことはないだろう).

なお、-darazu が北信一帯で用いられるほか、-zura, -ra を用いる地域でも併用されることがある(例. 木曾郡三岳村方言他)が、奈川村方言では -darazu は用いられない。

-zu 動詞に接続し、話し手の意志を表わす。

macimade 'iqte kozo (町まで行ってこよう). mesidemo ku'wazu (飯でも食おう).

-zu は意志のほか勧誘を表わす。上の例はそのまま勧誘を表わす文としても用いられる。

-zu は動詞・形容詞に接続して推量を表わす。

soNna kotomo 'arazu (そんなこともあるだろう). 'asitamo harezu (あしたも晴れるだろう). soremo 'jogarazu (それも良からう).

-zu は時に婉曲を表わす。

'ju'wazu 'joRmo neR (言いようもない).

-zu は内容を示す -to や、疑問や反語を表わす -ka が下接すると、-su として用いられる。

'iqte kosuto 'omo'u (行ってこようと思う). 'oQkaRni tanomasuka (母に頼もうか).

soNna kota 'arasuka (そんなことがあるもんか).

-cura 動詞・形容詞に接続し、過去の推量を表わす。

biQkura koicura (びっくりしたろう). sorja 'jeRgaQcura (それはよかったらう).

過去の推量は、'iQtazura (行っただらう), 'jeRgaQtazura (よかったらう) のように、-tazura をもってしても表わされる。-tazura と -cura の語法的意味の相違は、-ziura と -ra の場合と同じく、明らかでない。

なお、否定推量は次のようにあらわされる。

'igu (行く), 'aru (ある) を例に、肯定と対比して示す。

'iguzura — 'igaNzura

'igura — 'igaNra

'arazu — nagarazu

'iQcura — 'iganaNzura

'iQtazura — 'iganaNdazura

否定推量として、-meR~mai (まい) はこの方言では用いられない。

-meRga 動詞に接続し、勧誘を表わす。

bo'ja hireR 'igameRga (ぼやを拾いに行こうじゃないか). 'waNraR maruŋaQko simeRga (お前たち石蹴りをしようじゃないか).

-meRga は上の例のように未然形に接続する<sup>99</sup>。'igameR のように -ga なくして用いられることはない<sup>99</sup>。

なお、入山方言では 'igamaiga である。

-meRga の勧誘と先の -zu の勧誘との文法的意味の差は必ずしもはっきりしない<sup>100</sup>。

勧誘を表わすものに、-Nga があり、'igu (行く) によって示せば、'igaNga のように用いられる。これは共通語の「行かないか」にあたるもので、'igameRga との違いは、前者は「行く」という行為の中に自己は加わっていても加わってなくてもよいのに対し、後者はその行為の中に自己は加わってはいないという点にある。

## 2) 打消

-N この方言では打消表現として -N が、たとえば、'igaN (行かない), miN (見ない) のように用いられる<sup>101</sup>。

語法上の東西方言対立の指標の一つとして、打消における -na'i~-neR/-N があげられるが、この方言は西日本方言的特徴である -N を用いる。

-naN 打消の第2連用形として -naN が次のように用いられる。

dogeRmo 'iganaNda (どこへも行かなかった). komemo torenaNzura (米も取れなかったらう). soNna kotaR 'jaranaNdemo 'jeR (そんなことはやらなくても良い).

上で明らかのように、打消の過去として -naNda を用い、-nakaQta の類を用いない<sup>102</sup>。この点も西日本方言的と言える。

上の例で示した 'jaranaNdemo は 'jaraNdemo としても用いられる。

-nera 打消の順接仮定条件として -nera が次のように用いられる<sup>103</sup>。

'iganera damedazo (行かなければだめだぞ). soNna kotoR sinera 'jeRgaQtani (そんなことをしなければよかったのに).

-nera は -naraN が接続するときは、-nera naraN よりも -N naraN が用いられることが多い。'igu (行く) をとれば、'igaN naraN (行かなければならない) のように。-N naraN はさらに -NnaN として、'igaNnaN のようにも用いられる。

入山方言では -nera に代わって -njaR を用いる。'iganjaR (行かなければ), sinjaR (しなければ) のように。-naraN が接続するとき -N naraN となることは、-nera と同じである。-nera も -njaR もともに -neba から音韻変化したものであり、西日本方言的特徴としてあげられる<sup>104</sup>。

-na 動詞に接続し、禁止を表わす。ただし、-ru で終わる動詞に下接するときは、toNna (取るな), miNna (見るな), kuNna (来るな) のような形式をとる。

## 3) 能力と条件的可能

「この子は一人で着物が着られる」と、「この着物はことしはまだ着られる」の「着られる」の部分は、一方は「能力」を、他方は「条件的可能」を表わすが、共通語では同じ形式で表わされる。長野県方言では多くこの両者を区別するが、この点は奈川村方言でも同じである。先の例は前者は、

konoko'wa hitorade kimono ki'e'eru.

で表わされ、後者は、

kono kimono'wa kotosja maNda kirareru.

で表わされる。

この否定は、それぞれ、次のように表わされる。

konoko'wa hitorazja kimono ki'e'eN.

kono kimono'wa kotosja heR kirareN.

いま、幾つかの動詞について能力と条件的可能表現を、その肯定と否定について示せば、表3のとおりである。

表3

種 類 語 例	肯 定		否 定	
	能 力	条件的可能	能 力	条件的可能
'jomu (読む)	'jome'eru	'jomareru	'jome'eN	'jomareN
kiru (着る)	ki'e'eru	kirareru	ki'e'eN	kirareN
'ukeru (受ける)	'uke'eru	'ukerareru	'uke'eN	'ukerareN
kuru (来る)	ki'e'eru	korareru	ki'e'eN	korareN

#### 4) 指定表現

指定表現として古宿・神谷方言は共通語と同じ -da を用いるが、入山方言は -zja を用いる。

soRzjanoR (そうですね), sorja soRzjaQta (それはそうだった)。

-zja は西日本方言の特徴として知られるもので、この地方では「入山のジャ言葉」として有名である。-zja は角ヶ平でも使われた。

#### 5) 敬語表現と余情表現

敬語体系のあることが日本語の大きな特色であり、長野県方言でも敬語体系を持つ方言が多いが、古宿・神谷など奈川村方言の多くは、固有の方言では文法体系の中でこれを欠いている。

seNseR kore kuQte kuro. mugorGara seNseR kita.

これらの例は、そのまま共通語に置き換えれば「先生、これ食ってくれ」「向こうから先生が来た」にあたる。

代名詞を例にとると、古宿の固有の方言では自称は 'ore (単数) — 'oraR (複数) の1系列、対称は 'ware (単数) — 'waNra (複数), 'unu (単数) — 'uNzura (複数) の2系列ある。対称は2系列あるというものの、敬意の程度によって使い分けられるのではなく、後者は喧嘩などの場面で使われるにすぎず、広く上下にわたって 'ware—'waNra を使うことが多い。

呼び掛けは 'jai'jai, 応答は 'oR がもっぱら用いられ、敬意の程度による使い分けはないという。

以上は古宿方言の場合で、神谷方言もこれに準じる<sup>22)</sup>。ところが入山方言は敬語体系を持つ。少なくとも古くはかなり整ったものを持っていた。先の文例をとると、この方言ではそ

れぞれ、

seNseR kore 'agaraQsjare. mugorGara seNseR gozasjaQta.

のように言ったという。

まず、助動詞としては -Qsjaru, -saQsjaru がある。動詞 'igu (行く), miru (見る) によって、その活用をみると次のとおりである。

未然形	'iga-Qsjara-N	mi-saQsjara-N
第1連用形	'iga-Qsjari-teR	mi-saQsjari-teR
第2連用形	'iga-QsjaQ-ta	mi-saQsjaQ-ta
終止-連体形	'iga-Qsjaru	mi-saQsjaru
禁止形	'iga-QsjaN-na	mi-saQsjaN-na
目的形	'iga-QsjareR	mi-saQsjareR
仮定形	'iga-QsjarjaR	mi-saQsjarjaR
命令形	'iga-Qsjare	mi-saQsjare

補助動詞としては gozaNsu があり、'oha'joR gozaNsita (お早うございます), sa'joRde gozaNsu (左様でございます) のように用いられる。また、gozarimasu も古く補助動詞として用いられたという。

先の例にみられるように、動詞としても敬語動詞の類が幾つか認められる。

代名詞では、自称で 'ore—'oraR のほかに、'wasi—'wasira があり、目上に対しては後者の系列を用いた。対称では先にあげたもののほか、'oma'e, 'oma'esama があり、前者は同輩程度、後者は目上の者に対して用いたという。

呼び掛けには 'jai'jai の1種しか持たないが、応答には目上に対する 'ai, 同等以下に対する 'oR, または 'oi がある。

入山方言には文末余情表現にも敬意の度合による対立がある。-naR と -noR がそれである。同等以下には、soRzjanaR (そうだなあ), soRedenaR (それでなあ) を用い、目上には soRzjanoR, soRedenoR を用いる。

入山方言のかかる特徴は、角ヶ平方言にも認められたという。

さて、古宿方言、神谷方言には固有の方言として敬語体系を欠いているが、余情を添え、親愛の気持を示す終助詞の類は幾つかある。古宿方言を例に、その特徴的なもののみあげる。

-jeR 親愛の気持を表わし、優しさを添える<sup>84</sup>。

seNseR'jeR kore kuQte kuro'jeR (先生よ、これを食べってくれよ), 'eQkaNni 'ogiro'jeR (いい加減に起きろよ)。

-'jeR は目上にも目下にも用いられる。

-QcjaR 念を押し意味を強める<sup>85</sup>。

kuQte miroQcjaR (食ってみろよ), soNna kotaR 'arasukaQcjaR (そんなことがあるものかよ)。

上の -QcjaR に似た形式に -QcjeR がある。-QcjaR の意味に、親愛・優しさの意味を添える。先の文例はそれぞれ次のようになる。

kuQte miroQcjeR. soNna kotaR 'arasukaQcjeR.

-QcjaR, -QcjeR は古宿では使いが、入山・神谷・寄合渡のインフォーマントは使わないという。もっとも古宿での使用も高年齢層に限られている。



-NnaR 共通語の -naR にあたる。

soRdaNnaR (そうだなあ). 'jeR taQtateNnaR (家を建てたってなあ).

入山方言ではこの場合, soRzjanaR (そうだなあ) のように -naR を用いる。

-'jaR 疑問の意を表わし, 感動の気持ちをこめる。

maNda 'ware 'ogiteru'jaR (まだお前は起きているのかよ), heR soRdaQta'jaR (へえ, そうだったのかよ)。

この類の形式には, 以上のほか -'wa, -'jo, -sa, -zo などがあるが, 省略する。

この類の形式として, 入山方言では -niR を用いる<sup>4)</sup>。文末にあって親愛の気持ちをこめて余情を含む確認をあらわす。

soRzjaniR (そうだよ), korja NmeRniR (これはうまいよ)。

-niR は -'ja をともなって, soRzjani'ja, NmeRni'ja のようにも用いられる。-niR も -ni'ja も角ヶ平でも用いられた。-niR も -ni'ja も敬意の度合とは関係ないという。

#### 4 奈川村方言語法の位置

この問題を語法上の東西方言対立の点から考えたい。何をこの指標とするかは難しい問題を含むが, 取りあえず次の九つの指標を選んだ。斜線の左に東日本方言的特徴, 右に西日本方言的特徴を示す形式を記した。いずれもよく用いられる基本的な語を選び, その具体的な使用の中でこの問題を考えて行きたい。

- 1) 'ikana'i, 'ikaneR (行かない) / 'ikanu, 'ikaN
- 2) 'ikanakaQta (行かなかった) / 'ikanaNda
- 3) 'ikanakereba, 'ikanakerjaR (行かなければ) / 'ikaneba, 'ikanjaR
- 4) koreda (これだ) / korezja, koreja
- 5) 'okiro (起きろ) / 'oki'jo, 'okjoR, 'okir
- 6) kaQta (買った) / koRta
- 7) hanasita (話した) / hana'ita, haneRta
- 8) sirokunaru (白くなる) / siroR naru
- 9) tamaQteru (継続態と結果態の区別なし) / tamari'oru (継続態), tamaQtoru (結果態)

1)~9)について簡単に説明しておく。

1)~3)は打消表現に関するもので, 1)は打消の現在, 2)は打消の過去, 3)は打消の順接仮定条件を表わす。

4)は指定表現として -da を使うか, -zja, -'ja を使うかの対立。5)は1段型動詞の命令形語尾として -ro を用いるか, -'jo, -joR などを用いるかの対立。6)は ka'u (買う) など共通語のワ行5段活用動詞に対応する語が, 第2連用形で -Q をとるか, -V をとるか, つまり促音便をとるか, ウ音便をとるかの対立である。7)は hanasu (話す) など共通語のサ行5段活用に対応する語が, 第2連用形で -si をとるか, -'i などをとるか, つまり, サ行イ音便をとるか, とらないかの対立である。8)は形容詞の第1連用形で -ku をとるか, -R をとるか, つまり, ウ音便をとらないか, とるかの対立である。

9)について。たとえば, 共通語の<水が tamaQteru>は, 「水が現在たまりつつある」と

いう継続態にも、「水がたまってしまった、そしてたまった水がそこにある」という結果態にも用いられる。東日本方言の多くは、共通語と同じくこの二つの態を同じ形式で表わすことができる。それに対し、西日本方言に属する多くの方言は、たとえば〈水が tamari'joru〉（継続態）と〈水が tamaQtoru〉（結果態）のように、二つの態を形式の上で区別する。

以上について奈川村方言はどうであるか。対立点の多い古宿方言と入山方言とをとり、固有の奈川村方言によってこれを考える。参考のために、松本市街地方言と信濃側から野麦街道を越えた最初の集落である岐阜県大野郡高根村野麦方言の場合をも示す（表4参照）。表の計の欄で斜線の左には東日本方言的特徴の数値、右に西日本方言的特徴の数値を示す。

表4

方言 指標	奈川村入山	奈川村古宿	松本市街地	高根村野麦
1)	'igan	'igan	'ikane	'igan
2)	'igananda	'igananda	'ikanaNda	'iganaNda
3)	'iganjar	'iganera	'ikanakerja	'iganjar
4)	korezja	koreda	koreda	korezja
5)	'ogjo	'ogiro	'okiro	'ogjo
6)	kaqta	kaqta	kaqta	kaqta
7)	hanaita	hanerta	hanasita	hanaita
8)	siroR naru	sirogu naru	siroku naru	siroR naru
9)	区別なし	区別なし	区別なし	区別あり
計	2/7	5/4	8/1	1/8

これによってみると、古宿方言では東の方言的特徴を示す数値が西のそれを上回っているのに対し、入山方言では飛驒山脈の東麓にありながら、また、奈川村の中で最も松本寄りに位置するにもかかわらず、西日本方言的特徴を示す数値は極めて高く、飛驒野麦方言のそれに近い。語彙的な問題として存在動詞として入山方言で 'oru を用い、古宿方言で 'iru を用いている点なども、上の傾向と平行したものである。

では、なぜ入山方言がかくも西日本方言的特徴を有するのか。入山のインフォーマント忠地弥太郎氏は、安房峠を越えて信濃へはいり、入山を通る古い時代の鎌倉街道の交通が、飛驒の方言的特徴をここへ伝えたものと思うと言われる。それならば、安房峠より入山に至る街道筋の集落、安曇村大野川、同祠峠（今はない）などの方言は、どうして極めて東日本方言的であるか<sup>44</sup>など、疑問が残る。

私はこれには、飛驒よりの移住の問題がからんでいるのではないかと考えている。それを明らかにするためには、入山の古老の方言を語法のみならず、音韻、アクセント及び語彙にわたって、さらに精細に調査し、その資料を飛驒方言、特に飛驒上宝村を經由する鎌倉街道沿いなしその周辺の方言と比較することが必要であり、他方で地方史をはじめとする隣接諸学の成果とのつき合わせが要請される。

以上、従来必ずしも明らかでなかった東西方言境界地帯における方言の実態を、奈川村方言を中心に記述し、往昔の信飛交流の歴史を解明するための一つの資料を言語面から提供した。

## 注

- (1) 以上は『長野県百科辞典』（信濃毎日新聞社、昭49）その他によるところが多い。
- (2) この用法は古いものと言う。なお、kagaba は音声学的には [kagaba] である。語頭以外の位置におけるいわゆるカ行子音の有声化である。[k-, -g-] という分布を概略的にするにもかかわらず、これを [-g-] を g と解釈する根拠の説明は別の機会に譲る。
- (3) sareta も用いるが、これは新しいと言う。
- (4) この方言はモーラ方言ではなく、シラビーム方言である。したがって R (長音), N (撥音), Q (促音), Vi の i は 1 モーラとしての時間的長さを持ちえない。この方言で R が往々省かれるのはそのためである。詳しくは別に述べる。
- (5) 幾つかの文例から分かるように、格助詞 'o (～を), ga (～が) を省くことが多い。例を 1～2 挙げておく。'igisiromizu nomuto musu 'waguzo (雪融け水を飲むと回虫がわくぞ)。また、共通語では格助詞 -no をともなって表わされるところに -no なして表われることもある。古宿方言の場合をあげる。  
'ore hoR (俺の方) 'ware 'isjo (お前の着物) njur'jama 'jeR (入山-集落名-の家)
- (6) 入山方言は原則として -ai, -ae, -oi, -oe などの連母音の融合を示さない。これは角ヶ平方言にも共通する特徴で、奈川村の他集落方言と鋭角的に対立する。例を 2, 3 あげる。/ の前を入山方言、後ろを古宿・神谷方言とする。'agai/'ager (赤い), siroi/sireR (白い), ku'e/kwer (食え)。
- (7) kopita, kapita などイ音便形をとらない形式のはっきりした分布はよく分からない。長野県では上伊那郡辰野町小野方言に類似の形式があり、飛騨方言の中にもこれと同じ方言がある。長野県方言を例にとれば、このほかに、開田村方言の [koi<sup>h</sup>da], [kai<sup>h</sup>da], 各処に認められる [kojida], [kajida]; [konda] [kanda], あるいは [koita], [kaita] など、極めて多彩である。
- (8) これは共通語的。固有の方言では sitoneru を使う。第 2 連用形は sitone-ta。
- (9) このような現象は長野県方言では 'ociru (落ちる) のようないわゆる上 1 段活用でも認められ、'oqta (落ちた) のように用いる方言がかなりある。ただし、古宿・神谷・入山方言では 'ocita である。
- (10) 'jogaraba は古い表現形式で、今は 'jogerja を用いることが多い。
- (11) インフォーマントは、今生きていれば 100 歳以上の者が使ったと言う。
- (12) 地域により、sizukada, gaqkorda, sorda に -zura の接続する方言が認められるが、古宿方言にはかかる用法はない。ただし、入山方言では sizukazja (静かだ), gaqkorzja (学校だ), sorzja (そうだ) への -zura の接続が可能である。
- (13) たとえば、伊那谷の方言では -ra と -zura とはともに推量を表わすが、確実度に差が認められる。-ra は -zura よりも確実性の高い推量を表わす。この方言ではこの点につき、このような区別は認められない。
- (14) 方言によっては、-su はさらに下接語への同化から -Q と交替し、たとえば、'iqte koqto 'omo'u (行って来ようと思う) のように用いられることがある。中信地方の松本市方言などがそれであるが、奈川村方言ではこのように -Q で対応することはなかった。
- (15) -zura, -ra, -zu は東海東山方言の語法的特徴としてあげられるものである。中部地方におけるこれら諸形式の分布については、牛山初男『東西方言の境界』（昭44）、長野県における分布については、馬瀬『信州の方言』（第 1 法規出版、昭46）などを参照されたい。
- (16) 長野県方言を例にとった場合、動詞 'iku (行く) を例にとれば、'ikumerka のような接続は、上

伊那中部以北、中信松本平地方、北信地方に多く、木曾地方では一般に 'ikamaika~'ikamerka が多いが、南部大桑村辺以南では 'ikoma'ika となる。

- (17) 柴田武氏は静岡県掛川付近における -zu と -ma'i の文法的意味の違いについて、-zu は "Let's go!" の意味で消極的な勧誘、-ma'i は積極的に手でも引っぱってという積極的な勧誘と述べておられる。柴田武「東海・北陸地方の方言の特徴」(『全国方言資料3』日本放送協会、昭41、同書 p.18)。
- (18) -N は長野県では木曾地方の北部を除く大部分の地域、上伊那の中部以南で主として用いられる。奈川村と接する乗鞍山麓安曇村大野川では -ne(R) を用い、これは飛騨山脈を越えて岐阜県吉城郡上宝村中尾まで張り出している。往古の鎌倉街道による彼我の交通のあとを偲ばせるものである。ただし、上宝村中尾におけるこの -ne(R) は古老の一部に僅かに用いられるにすぎない。
- (19) -nanda は南信、中信、中信と接する北信地方の一部地域で用いられる。-N の分布と比較するとその地域は広い。
- (20) -nera の詳しい分布はよく分からない。
- (21) -njar は長野県では伊那谷や木曾谷、松本平のかなりの地域に分布する。
- (22) 敬語体系を持たない、あるいは極めて貧弱だというのは、木曾の山村方言と共通する性格である。
- (23) 青木千代吉『信州方言読本 語法篇』(信濃教育会出版部、昭26)によれば、丁寧な親愛感を持つ -e が、下伊那地方で用いられるとあり、また、木曾南部地方でも用いられるようだが、確実なことは分からないという(同書 p.135f.)。奈川村方言の -jeR はこれと同種のものと思われる。なお、長野県方言諸地域に見られる sorka'i (そうかい) ~sorka'e, sorda'wa'i (そうだわい) ~sorda'wa'e などの -i や -e の類も古宿方言では用いられない。
- (24) -Qcjar は隣接地域では安曇村大野川で用いられ、また、少し離れては木曾郡三岳村などでも用いられているところから、それらと結びつく勢力であることが分かる。
- (25) 入山などにおける -ni'ja は近隣方言でも耳に立つ表現形式であるらしく、たとえば、安曇村大野川ではこれについて次のように言う。cunopadairato njur'jamamura'wa nekodemo nainoni njarnjarto (角ヶ平と入山村はネコでもないのにニャーニャーと)。
- (26) その詳細は別の機会に譲る。

〔後記〕 この調査に対し多大の便宜を与えられた奈川村教育委員会の各位、協力をいただいたインフォーマントの方々にお礼申し上げる。なお、奈川村方言の音韻、アクセント及び語彙については機会を改めて述べる。